

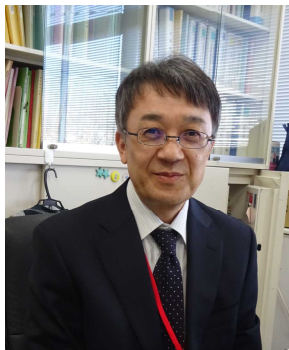
読書のすゝめ

その8

H 31 4 / 19

新任者紹介 ⑦

宮部 裕之先生 (主査兼事務長)

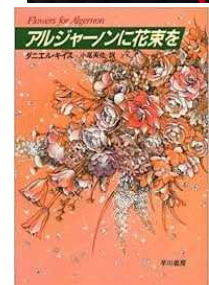


『アルジャーノンに花束を』ダニエル・キイス

ムスカリ



もう随分前に、好きなアーティストの楽曲に同タイトル (曲はDEAR ALGERNONですが) のものがあつたので読んでみた本です。



知的障害者の主人公が、動物実験で賢くなったハツカネズミ「アルジャーノン」に感動し、実験台として脳手術を承諾。みるみる天才になっていきますが、数々の悲劇が起こり、最後には全て元に戻ってしまふという物語です。

人として大事なものは何なのか、幸せとはどんなことなのか、瑞々しい感性を持つ年頃の皆さんにおすすめします。

大林 可奈子先生 (2年8組副担任・英語)



『キッチン』吉本ばなな



中学生の頃初めて読んで以来、好きな作品の一つです。様々な言語に翻訳され、世界各国でも広く知られている作品です。唯一の肉親を亡くした主人公が、ある親子と少し奇妙な同居をしながら、孤独や悲しみと向き合っています。自分の大切な人がいなくなっても世界は変わらないし、人生は続いていく。そんな現実には気づかされる一方で、隣り合わせにある何気ない日々の幸せを改めて感じさせてくれます。

岡部 恵先生 (2年7組副担任・地歴公民)



『空飛ぶ広報室』有川浩 (幻冬舎文庫)



この作品は、不慮の事故で夢を絶たれた元パイロットが異動した先でいろいろな人と出会い、自分の道を新たに切り開いていく物語です。ドラマで見て知っている方もいるのではないのでしょうか。困難な時や、挫折しそうになった時、それと向き合うことで新たな道に気付くことができたり、支えてくれる仲間の大切さに気付いたりすることのできる一冊です。

飯田 猛士先生 (2年1組副担任・保健体育)



『アキラとあきら』池井戸潤

銀行を舞台とした半沢直樹や下町ロケットなどをテレビドラマで見ようになり、作家・池井戸潤を知りました。

それまでは、知識を豊かにしようとの思いから主に新書をよく読んでいましたが、どこか疲労した頭や心を癒やそうと昨年は小説を読むことに没頭しました。池井戸潤の描く世界には緊張感と爽快感がえられて時間を忘れて読みふけていました。ちょっとした現実逃避だったのかもしれない。

この「アキラとあきら」は零細工場の息子と大手海運会社の御曹司の物語です。かつてない試練が降りかかったときに逆境に立ち向かう二人のアキラの人生をかけた戦いの物語です。

